

県立郷土館 青森南高でワークショップ

高校生が考える未来の博物館とは。耐震性能不足のため休館中で、移転を含めて検討している青森市の県立郷土館は7月、新しい博物館の構想作成に高校生の意見も取り入れようと、同市の青森南高校でワークショップを行った。生徒からは「子どもから大人まで楽しめる体験の充実を」「気軽に利用できる飲食エリアを整備してほしい」など多様な意見が出た。

(工藤俊介)

「体験型活動充実を」

「飲食エリアほしい」

生徒から意見続々

ワークショップは①博物館 施設、博物館や学芸員に興味がある1〜3年生約20人が参加②資料保存や梱包など学芸員の仕事を体験③未来の博物館の在り方を考える④グループ発表―をテーマに計4回実施。郷土館の伊丸岡政彦主任学芸員は、同館は県内唯一の博物館 講師を務めた。



未来の県立郷土館について意見を発表する生徒たち



ヒラメなどの標本に興味深そうに観察する生徒たち

総合博物館で考古や歴史、自然などあらゆる分野の資料を保存している「青森の名刺代わりの施設」と紹介。生徒たちは博物館や学芸員の役割について理解を深め、ヒラメやザリガニなどの標本にも触れた。

各グループの発表では「交流サイト(SNS)に載せたくなるようなおしゃれなグッズやエリアを作って」「仮想現実(VR)などを活用した体験型アクティビティを充実させて」などという若者らしい意見も。一方で「郷土館は若い世代の認知度が低いので、SNSを活用した積極的な発信が必要」という厳しい意見もあった。

櫻庭美貴子さん(普通科2年)は「若い世代はSNSを使う人が多いので『友達に教えた』と思うような魅力的な展示をすれば、自然と人が集まる場所になるはず」と指摘。工藤末鈴さん(グローバル探究科1年)は「夜に開館する『ナイトミュージアム』などのイベントを企画すれば、多くの人に何回も来てもらえるのでは」と話した。

県教育委員会は本年度、郷土館の整備検討会議を立ち上げ、来年2月ごろに最終報告をまとめる見通し。同校生徒から出た意見は同会議や県教育長に報告される。

同館は1973年に開館した総合博物館で、収蔵資料数は約10万点。新館(地上3階、地下1階)と、登録有形文化財の旧館(2階建て、旧青森銀行本店)の二つの建物からなる。耐震診断の結果、震度6強以上の地震で建物の一部が倒壊する恐れがあるとされ、2020年10月から休館したままとなっている。従来は既存施設の耐震補強など長寿命化を軸に検討してきたが、青森市のハザードマップで現在地が津波浸水区域とされたことなどから移転を含めて検討する方向となった。

東奥日報 2025年(令和7年) 8月8日(金) 掲載

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。